

光悦茶碗の価値形成過程

—近世中期における使用・収集・再生産の検証を通じて—

讀井 瑞祥 (東京大学)

本阿弥光悦(1558-1637)は京都において家職の刀剣鑑定業を営む傍ら、楽焼陶工らとの協働を通じて軟質施釉陶器の茶碗を自作したとされ、多数の伝承作品が現存しているが、先行研究ではそれら光悦茶碗の様式分析や制作手法の解明に関心が注がれてきた。一方、作品の受容史研究については、光悦没後間もない時期において、表千家4代江岑宗左(1613-72)の周辺で茶会使用が開始されたという指摘を除けば、本格的には着手されてこなかった。

そこで本発表では、茶会記や道具目録などの文献資料が比較的豊富に残る近世中期(17世紀末葉~18世紀中葉)を中心に、光悦茶碗に言及する記事を網羅的に抽出したうえで、その受容に携わった人的ネットワークに焦点を当て、作品の価値形成過程を検証することを試みる。まず、表千家6代覚々斎(1678-1730)の茶会記および道具書付帳からは、その支持基盤を担った京都・大坂・江戸の豪商茶人たちによって、光悦茶碗の積極的な茶会使用と収集が進められていたことが判明する。また、覚々斎門下の伊丹の醸造家・有岡道瑞(1661-1734)の『茶湯百亭百会之記』を精査すると、商人に加え公家や僧侶によっても光悦作品が用いられており、光悦賞玩の多層的な浸透状況が窺われる。さらに、大坂の両替商・鴻池道億(1655-1736)は住友吉左衛門と交わした書簡のなかで、楽焼初代長次郎(?-1589)よりも光悦の茶碗を高く評しており、作品の批評・鑑識にまつわる言説も確認される。そして、光悦茶碗は京都の糸割符商・坂本周斎(1666-1749)の道具見聞記を底本とする『中興名物記』にも掲載され、「名物」の評価と所在に関わる情報が豪商茶人のサークルにおいて共有されるに至っていた。これらの作品評価は、覚々斎ら権威的な茶匠が支持者の求めに応じて施した命銘や書付を通じ、確定・増幅されたと考えられる。

光悦評価の普及に連動するかたちで、京都の楽焼・玉水焼や加賀の大樋焼など軟質施釉陶器の諸窯において、光悦茶碗の写しの制作が始まっていたことが、覚々斎の茶会記や伝世品の存在から判明する。たとえば、光悦茶碗「加賀光悦」(相国寺蔵)は、江戸の材木商・冬木屋上田家の所有に帰した18世紀前半期を皮切りに、参照すべき本歌として再生産が繰り返された。さらに、同時期の茶会記や箱書における「光悦形」という言葉の出現は、光悦様式そのものに対する認識の成立状況を示しており、「加賀光悦」のような特定作品の複製だけでなく、各地の陶工が光悦の作風を独自に翻案した作例も展開された。こうした派生的な作品の流通によって、光悦による本歌の価値は側面から補強されることとなった。

近世後期から近現代にまで存続したマルチタレントな芸術家としての光悦イメージは、近世中期における豪商茶人のネットワークにおいてかたちづくられ、美術工芸品の再生産を通じてさらに増幅された。同様の調査手法を伝光悦作の漆工や書画にも適用することで、より総合的な受容史研究の展開が見込まれる。